

紙を極める、紙を広める！

紙季報

し

き

ほ

う

JPA

一般社団法人 日本ペーパークラフト協会

Japan Papercraft Association <http://www.j-papercraft.com/>

第2号 (2012年秋号)

会報誌 年4回発行

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町2番14号

飯田橋KSビル 2F(紙宇宙内)

TEL:03-3513-5810(代) FAX:03-3513-5811

トップ対談 / 凸版印刷株式会社 足立直樹会長… 1-3

ザ・ペーパーアーキテクト / 加藤幸吉氏 …… 4
情報交換会レポート / 特種東海製紙 pam 東京…

トップ対談

凸版印刷株式会社 代表取締役会長 足立直樹氏 VS 日本ペーパークラフト協会 会長 鶴田卓彦氏

足立会長 本日は、お越し頂き、誠にありがとうございます。このビルは、2000年に弊社の創業100周年を記念し、建てたものです。中にある印刷博物館は、開館以来、約37万人の方が訪れています。500坪余りの小さな博物館ですが、今は、全国から、学生さんが印刷の研究や修学旅行でお見えになり、平均2時間半ほどの滞留時間です。また併設するバーチャルリアリティ(VR)シアターでは、世界の文化財をデジタル化して公開しています。ローマのシステリーナ礼拝堂はじめ、現在では国内外の文化財 約30件をVRコンテンツ化しています。



一番新しいものは、上野の科学博物館で開催された「インカ展」で公開されたもので、空撮したマチュピチュを三次元で再現しました。また、国宝阿修羅像をデジタル化して公開するなど多くの方々にご覧頂いております。

現在、印刷博物館ではヴァチカン教皇庁図書館と共同プロジェクトを展開しています。プロジェクトはパリンプセストという、紙が普及していない時代に羊皮紙に文字を書いた写本を解析しようというものです。当時は、羊皮紙に文字を書いて、消してまた書くということをしていました。この羊皮紙の写本が、ヴァチカン教皇庁図書館に大量に保管されており、消された文字を読みたいというご依頼の中で当社のスキャニング技術を活かして三代前までの消した文字を読むことができました。この前、ヴァチカンに参りましたら、今6万頁あるそうです。解読はこれからのようで、あと何年かかるか、全部を解読するには30年から40年かかるそうです。それから、中国の故宮博物院では、2000年から共同研究プロジェクトを開始しました。院内にバーチャルシアターを設置し、太和殿や保和殿など故宮博物院の建物や所蔵する沢山の文物をデジタルアーカイブ化し、再現する取り組みをしています。

鶴田会長 では、本題に入らせて頂きます。印刷業界は、IT化の進展などにより、急速に変貌を遂げておりますが、本日はその現状や今後の展開につきまして、足立会長にお伺いしたいと思います。私は、印刷業界は、人類の歴史と様々な文化を後世に継承する、偉大なそして知的な産業であると認識してお

ります。足立会長は、そのような業界をどのように捉えていらっしゃるか、まずそのあたりからお伺いしたいと思います。

足立会長 仰るように、印刷は羅針盤、ダイナマイトとともにルネサンス期の三大発明の一つとされています。500年以上前から、印刷技術があって、その文化を世界に広めていくことができた。日本の印刷技術は、仏教の影響もあるかとは思いますが、東大寺などに分置されている百万塔陀羅尼という經典があり、高野山の御経もそうですが、木版で複製を広めていったという歴史が有るわけです。それは、貴重な文化遺産であると思っています。

その後、徳川家康が1600年初めに、これからは武力の世界ではなく文化の世界だということで、駿河版銅活字として、約17万点の銅版の活字を鑄造しまして、大蔵一覽と群書治要という印刷物を刊行したと言われています。家康は版木ではなく活字で文化の世界を作る考えのようでした。その現存する活字約36000文字を昭和の初めから凸版印刷の板橋工場でお預かりをしており、戦災にもあわず、重要文化財として残っております。ところが、家康以後、江戸時代には印刷が木版に戻ってしまいます。かわら版などです。そして、明治の初めから長崎から活字の文化に戻りました。戦後は、印刷がパッケージ関係や生活用品にも進出してその事業領域が広がっていきます。

凸版印刷は、株券や有価証券の印刷から始まりました。当時、大蔵省印刷局にいたキヨッソーネという印刷技師の教えを受けた弟子3人が、「エルハート凸版法」という技術を持って独立したのが創業です。当時のベンチャー企業です。

鶴田会長 私どもは、2年前に一般社団法人日本ペーパークラフト協会を設立しました。このペーパークラフトは、立体紙加工製品ということで、全世界に静かなブームを呼んでおります。



この協会の会長を仰せつかっているわけですが、足立会長にその存在を十分に認識して頂き、業界発展にご協力頂きたいと思っています。

足立会長 はい、ありがとうございます。

鶴田会長 現在、世界人口は 70 億人を越えたと言われていいますが、歴史上、人類の活躍が地球上で始まったのは、文字や絵を書き、それらを印刷できるようになってからだと言われています。現在の文化、文明や経済、産業の驚異的な発達と関係が深いと思われまますので、足立さんの印刷の歴史観のお話を聞かせて下さい。

足立会長 印刷という文化、文明もしくは技術というものは、大きく捉えますと、人類の生活産業に位置付けられるものだと思います。もちろん、文字や活字で知識を広めていくという事はありますが、生活の合理化の中で、印刷が必要なのだと考えます。かつて我々の子供の頃は、母親が鍋や窯で作ったものは、賞味期限はなかったわけですが、生活にまつわるパッケージ品種が生活の安心、安全に貢献するようになってきています。印刷産業がそういうものに事業領域を広げてきています。これからは、環境商品をいかに作り上げていくか、エコロジー商品をどうマーケットに提供していくのか、ということがより重要になります。また、ユニバーサルデザインという観点で、誰にでも使いやすく、生活しやすい製品の提供が、我々の産業の使命だと考えています。

鶴田会長 印刷業は、その商業印刷部門を調べますと、産業界全体に深く関連している状況が分かり、一方では、出版印刷部門を見ますと、広く文化全体に関係している実情が分かると言われます。凸版印刷のケースで結構ですから、印刷の本質をお話し下さい。

足立会長 商業印刷という言葉は、我々の業界用語みたいなものです。要は、商業印刷、出版印刷の今後の技術的進歩がどのような変わっていくのか。これが我々の産業にとって大きな問題だと思っています。いわゆる出版業界を見ても毎年少しずつ出荷額を減らしており、昨年度の統計ですと 2 兆円を割り込んでしまいました。寂しい状況になっています。若者の活字離れやデジタル化の進展によるデジタルブックや電子書籍といったものの出現で、今までの紙に対する印刷がどう変化していくのかを考えますと、ここ 1 年から 2 年が変革の時に来ているのかと思います。私は、紙の文化、出版文化を守りながら、デジタル化の波との相乗効果をどのように上げていくかを、出版業界、印刷業界で真剣に考えていかなくてははいけないと思います。

鶴田会長 紙に印刷したものから受け取る情報とテレビなどのデジタルから受け取る情報は、その印象や記憶が全然違うと思います。デジタルな情報は瞬間的には深く入ってくるが、すぐ消えてしまいます。その点、紙に印刷された情報は、長く記憶にとどまっています。

足立会長 それを研究している方に伺った人間の脳の話ですが、光を通じて感じるのは左脳なので、短い時間で記憶が失せてしまう、印刷された文字は右脳で見ると、知識として残ると言われているのだそうです。ですから、雑誌のように 1 週間で次の号が発行され、情報が置き変わっていくものはデジタルで、活字で知識として残すものは紙の温かいぬくもりの中で見ていく、こういったことを大切にしていかななくてははいけません。大変ありがたいことに、最近、若者が単行本を読み始めています。電子ブックで読み、これは面白いと思ったものを、印刷した本で買って、また読む。といった行動が目立ってきています。

鶴田会長 高機能、エネルギー化や、生活環境化では、御社では、ラミネート包材やゼオライト機能紙などにも力を入れています。新しい市場に挑戦している面は、いかがですか。電子マネーの決済プラットフォームを開発したり、電子書籍では、ソニー、KDDI、朝日新聞と御社の 4 社で、プラットフォーム形成と運営の新会社「株式会社ブックリスタ」を発足させて、大きな話題になりました。このほか、現在ブームの太陽電池や液晶ディ

スプレイなどあり、印刷業が、どのように支え、リードしているか、説明をお願いします。

足立会長 高機能部材や、エネルギー関連部材に関して重要な、ラミネート技術やコーティング技術は、印刷業の得意なところでは、凸版印刷は、グループ会社を含めると 200 社以上の会社があります。そのうち 190 社余りは「印刷」のことを深めていこうとする企業として、まだまだ研究の余地が沢山あります。ゼオライト機能紙は、昨年の 3.11 の大震災・原発事故のことがあり開発した製品です。紙にゼオライトを漉きこみ、放射性物質を吸着させるものです。地面に敷いてその上に放射性物質を含んだ土をかぶせ、放射性物質を吸収させるというような実証実験も福島で行っているところです。電子書籍への取り組みなど新しい活動は、出版社と読者のネットワークをどう結んで行くのか、出版社と取次の関係、出版社と読者との関係、著作権の問題などが大きなテーマになってきます。

鶴田会長 私たちは、印刷と言うと、すぐに新聞、雑誌、単行本を考えてしまいますが、主力分野は全く変貌を遂げていて、日本経済や世界経済の情報化、高テクノロジー化、高機能・エネルギー化、生活環境化など、時代の潮流を、印刷業が創り出していると言われていています。御社の製品を見ましても、情報化ではテレビの電子オリコミ、チラシや閲覧サービスを実現しています。高テクノロジー化では、御社の開発製品が、世界のグローバルスタンダードになり、世界最大のシェアを握っている、有名な「GLフィルム」がある。食品やトイレットリー商品に使う透明ハイバリアフィルムです。また、最近では、リチウム 2 次元電池用外包材や、太陽電池のバックシートや包止材フィルムで、他産業や海外大手メーカーと提携して開発に成功したケースが有ると聞いていますが、いかがですか。

足立会長 印刷というものは、生活に密着しているものです。我々が提供している電子チラシ、名前を「シュフー」と呼んでいます。自宅の周辺のお店のチラシ情報が毎日、毎日パソコンに送られてくるサービスです。現在、約 80,000 店舗のチラシを見ることが出来ます。鶴田会長のご自宅の周辺のスーパーマーケットでの特売情報やイベント情報が、チラシとしてパソコンに出てくる。スーパーだけでなく、スイミングスクールやらから情報が送られてくる。生活に密着した大変便利なサービスです。また、「GLフィルム」というのは非常にバリア性の高い環境にやさしいフィルムとして、アルミに代わる素材です。再生利用も可能で、食品の包装材料として多くの商品に使って頂いています。さらに、林野庁と一緒に「森を育む紙製飲料容器普及協議会」という協議会を設立しまして、間伐材を使ったカートカンという紙の飲料容器の普及を図っています。収益の一部を寄付し、社会貢献しております。



鶴田会長 凸版印刷とグループの企業規模は、現在、どのくらいですか。他に大日本印刷とグループがありますが、こうした巨大産業や巨大企業が形成されているのは、世界広しと言えど、日本だけだと言われます。日本人としては、誇らしい気持ちになるのですが、その原因は何でしょうか。諸外国と比較して、教えてください。

足立会長 今、印刷産業の規模は約 6 兆円と言われ、従事している従業員は約 35 万人、事業所数は約 4 万社です。そうしますと、1 社平均 10 人以下となります。産業全体では中小企業が多い状況です。その中で、凸版印刷は今年 1 兆 5500 億円の売り上げです。日本の印刷業だけが総合印刷会社です。何でもやるのです。出版印刷から商業印刷、パッケージから電子部品や半導体フォトマスクまで、幅広い事業領域を持つ特異な存在です。アメリカや欧州を見ますと、印刷は印刷、加工は加工で狭い範囲でしか事業をしていません。ただ最近では、米国のダネリーのような総合印刷業が生まれてはいます。

鶴田会長 日本の印刷業は世界一と言えそうですが、その最高技術をバックに、グローバル化に力を入れています。米国の IBM と先端フォトマスクの開発を進めていますし、米国デュボンとはフォトマスクの子会社化や、太陽電池バックシートの共同開発などに取り組んでいます。研究開発の今後の方向とともに、グローバル化のさらなる進展について、足立会長の構想や抱負を聞かせて下さい。

足立会長 IBM とは先端のフォトマスクを共同開発し、半導体メーカーに供給しています。それからデュボンのフォトマスク関連の子会社を買収して、ワールドワイドで事業を展開しています。また太陽電池バックシートもデュボンの持っている「テドラー」というフィルムの独占販売権を取得し、展開しています。海外の持っている技術を生かしながら、日本での生産にあたっています。

鶴田会長 お話を伺って、印刷の質的变化に驚いています。印刷と言うと、紙に文字を表すということを思い描いていましたが、とても勉強になります。

足立会長 太陽電池バックシートは特殊な溶剤をフィルムの上に塗っていくわけです。太陽電池の背面に使用され、中の部品を守るためのシートで、均一でなくては困りますから、均一に塗る技術が必要となります。フィルムにコーティングするということです。液晶テレビのカラーフィルターなどの製造の現場を見ますと、やはり印刷の技術が生かされていることを実感します。

鶴田会長 印刷は、人々の生活の隅々まで入り込んでいるということですね。

足立会長 その通りです。このビルの 2 階には当社のショールームがあり、幅広い印刷技術を活用した様々な製品を紹介しています。

鶴田会長 2000 年にオープンした印刷博物館について、再度お尋ねしますが、お聞かせ下さい。メセナアワード 2010 で、メセナ大賞部門の印刷文化振興賞を受賞されたそうですが、先に述べましたように、印刷業が産業、

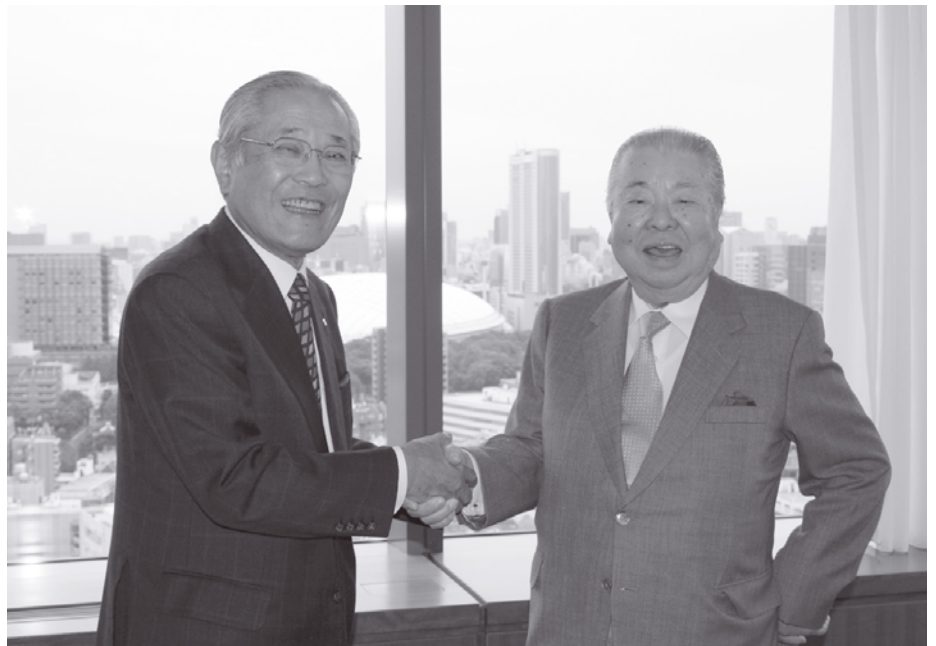
文化、最先端技術をリードしているだけに、博物館の持つ意義は大きいと思いますし、小学生の総合学習にも活用されているそうですが、これからの子供たちや若い人たちの教育にも役立つでしょう。今後、どのように運営されていくかも含めて、お話を伺いたいと思います。

足立会長 日本には、残念ながら印刷の博物館は有りませんが、海外に行きますと、自治体レベルでも印刷博物館があります。2000 年に、100 周年のお礼に設け、作って良かったなあと感じています。子供さんに活字に慣れ親んでもらえばありがたいと思っていましたが、先ほども何十人の子供さんたちの列ができ、全国から修学旅行で学生さんが来ます。去年からは、土日は、はとバスのコースにもなっています。

鶴田会長 それは素晴らしい。訪れる方も、素晴らしいですね。

足立会長 近くの小学校の課外学習にも協力しています。その中で 5 年生のポスター作りのお手伝いをしました。1 年生を迎えるためのポスターだそうです。今でもメッセージカードを 1 年生にプレゼントしているそうです。活字を使ってカードを作ったりしています。

鶴田会長 今日は、印刷についての奥の深い有意義なお話を伺いました。また、手が込んだ飛び出す絵本などの実際の製品も見せて頂き、ペーパークラフトの大事さを改めて感じました。お忙しいところありがとうございました。



プロフィール

足立直樹 (あだち なおき) 氏
凸版印刷株式会社 代表取締役会長

昭和 37 年 中央大学法学部卒
凸版印刷株式会社に入社
平成 5 年 取締役商印事業本部商印事業部長
平成 7 年 常務取締役商印事業本部長
平成 9 年 専務取締役
平成 10 年 代表取締役副社長
平成 12 年 代表取締役社長
平成 22 年 代表取締役会長
現在、印刷工業会会長、
日本印刷産業連合会会長、
学校法人中央大学理事長等

鶴田卓彦 (つるた たくひこ) 氏
一般社団法人日本ペーパークラフト協会 会長
日本経済新聞社 元社長
横綱審議委員会 委員長

昭和 27 年 早稲田大学第一政治経済学部卒
日本経済新聞社に入社
昭和 42 年 同社東京本社編集局経済解説部長
昭和 52 年 取締役東京本社編集総務
昭和 57 年 常務取締役編集担当東京本社編集局長
昭和 60 年 専務取締役
昭和 63 年 代表取締役副社長
平成 5 年 代表取締役社長
平成 15 年 代表取締役会長
平成 22 年 旭日大綬章受賞
現在、横綱審議委員会委員長等

会員紹介

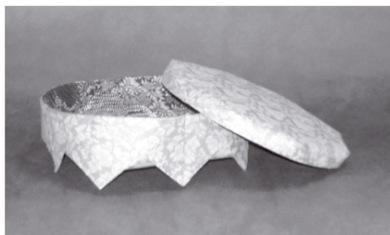
ザ・ペーパーアーキテクト

かとう こうきち
K工房 加藤 幸吉氏

今回は、加藤幸吉氏のご紹介。「パッケージデザインや創作折り紙は、まさに日本の伝統文化の表れ。喜んで多くの方たちにお伝えしていきたい。」と語る。



「紙は木から作られます、ならば紙を樹に戻そう、紙から樹を創ろう」という発想から生まれた「創作折り紙・樹の面」をメインテーマとし、さまざま鳥や動物、インテリア飾り物、メルヘンの世界、実用的でインテリアとしても飾ることのできる「器（うつわ）」を折るといった、折り紙創作活動をされている加藤幸吉さんの紹介です。



「折り紙は、純然たる日本古来の貴重な文化遺産。後世に残る折り紙を傳承し、新たな創作折り紙を創ること、が楽しみであり、大きな夢・励みである」と

語られる。

加藤さんの活動は、実に幅広い。創作折り紙・展示会を2010年から毎年開催し「もちろん、来年もしっかり計画中」。この展示会は、淡彩スケッチを描かれる奥様の加藤比佐代さんとの「二人展」。

大学時代の同級生の二人展、「大きく夢を描く・創作を折り続けてゆくことがライフワーク」と話される。

加藤さんの折り紙著書には、「創作折り紙・うつはもの（器）」（新風舎）、リサイクルおりがみシリーズ「チラシでおる生活雑貨」、「封筒でおる動物」、「新聞紙でおる兜」（誠文堂新光社）など多数。

「年1回ファッション系学院で二十歳前後の学生に伝承・創作折り紙の講座を担当しています。鶴など日本伝統折り紙80点余りの中から25点ほど選定し、折り紙の歴史から幅広い作品に接することを心していますが、若い人たちも折り紙に接する機会が少ないこともあって皆楽しそうです。他のカルチャー講座では、生徒さんも老若男女集まり和気あいあい楽しんでいます。海外に行かれて“現地の人に折り鶴を折ってとても喜んで頂いた”という話を聞きますと、日本古来の折り紙のPRを含め、とても嬉しく感じる時です」。

「本職であるパッケージデザインや創作折り紙は、まさに日本の伝統文化の表れ。機会があれば、喜んで多くの方たちにお伝えしていきたい。」と語って頂いた。



ペーパーエンジニア：加藤 幸吉氏
K工房 主宰 <http://www5.ocn.ne.jp/~k-kobou/index.html>

- 1946年 山形県鶴岡市生まれ
- 武蔵野美術大学卒業後、本州製紙（現王子製紙）パッケージングデザインセンター入社
- 1993年同社を退社し、独立。現在に至る
- パッケージ制作・企画、包装人育成・研修、緩衝・固定技法
- 創作・折り紙、出版、カルチャー講習
- 創作・紙クラフト

情報交換会 レポート

特種東海製紙 pam 東京

今年3回目のJPA情報交換会が、7月18日に特種東海製紙pam東京にて開催されました。会員18名が参加し、ファンシーペーパーやアルミ箔貼合紙などの特殊紙について研修を行いました。

特種東海製紙 pam について

特種東海製紙は、静岡に生産拠点を有するファンシーペーパーなど特殊紙を得意とする製紙会社です。また、昨年度より「紙わぎ大賞」の運営を手掛けています。今回、同社の東京本社内の「Pam東京」を訪れ、色彩・風合い豊かなファンシーペーパー、付加価値を高めた機能紙について研修を実施しました。また、「紙わぎ大賞」作品研修として、過去の応募作品について意見交換などを実施しました。

研修後、同スペースの壁一面に展示されたファンシーペーパーなどの製品群について、その彩り、質感などを確かめて知識を深めました。



特種東海製紙 PAM東京



同社研修室での研修の様子